『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第４８回】

キリスト教が世界宗教へと発展していくうえで、重要な役割を果たした人々のうちの一人がパウロです。今回はその人物像と、彼の「復活したイエス」との出会いについてみていきたいと思います。

✞　イエスの十字架上の死と復活　（７）　　使徒パウロについて

パウロとはどんな人物だったか

パウロは現在のトルコ南東部の港町・タルソスで紀元前後に生まれました。ユダヤ本土ではなく、メソポタミアからギリシャ・ローマ世界に広く散らばって住んでいたユダヤ人の一人ということになります。彼の母語はギリシャ語で、豊かなヘレニズム［古代ギリシャの人間中心的な合理的精神を基盤とする文化・思想］的教養の持ち主でした。『彼にはユダヤ人を超える国際主義的な要素があらかじめ備わっていた』（山我哲雄氏）といわれます。

他方で彼はユダヤ教ファリサイ派の律法学者で、少年の頃（6歳という説あり）から「律法」を徹底的に学び、かつ記憶して心に刻みつける毎日を送ったといわれるほど熱心なユダヤ教徒でした。ですからパウロのうちには、ユダヤ人を超える幅広い見識と、極めてユダヤ的な要素が同居していたといえます。彼は青年期の自分を『フィリピの信徒への手紙』3章に、自らこう書き記しています。

……

5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、 6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。

……

律法を純粋に守り通そうとする熱意あふれる青年 ― それが若き日のパウロでした。その熱心さを支えていたのは、『彼の強烈なユダヤ人としての自意識と誇りであった』と小河陽（おがわあきら）先生（立教大学文学部教授）は書いています。先生は、わざわざ「ベニヤミン族の出身で」と書いているのは、ベニヤミン族はバビロン捕囚後、ユダ族とともに新たなイスラエル共同体の中核となった集団であり、「ヘブライ人の中のヘブライ人」というのと同様、自分が『生粋のユダヤ人という自慢であろう』としています。そしてファリサイ派に属していたというのですから、「律法を厳格に守り従う者が、神によって救われる」と考えていた若者だったわけです。

6節に『律法の義については非のうちどころのない者』だったとあります。この「義」という言葉は、私たち日本人にとってはちょっと理解しにくいですね。「律法が示す正しい道（道理・教義など）について、私はすること・なすこと完全で、だれからも非難されるところがない」という自信に満ちあふれたユダヤ教徒でした。

なぜパウロは原始キリスト教団を迫害したか

この「自己紹介」で注目すべきは『熱心さの点では教会の迫害者』であったという部分です。パウロは、イエスの死後エルサレムに成立した原始キリスト教団に対する激しい迫害者でした。

……

3 サウロ［パウロのユダヤ名］は家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。

……『使徒言行録』8章 ……

「ファリサイ派」については第41回で詳しく説明しましたが、ここでは次の2点に注目してください。

①律法は彼らにとって絶対的なものであり、その遵守を何よりも求めた。

②「神は聖なる方で、罪人を忌み嫌われる」という神理解を持つ。

パウロにとって、安息日の掟を守らず、罪人(徴税人、姦淫の罪を犯した女性、重い病気にかかった者など)と食事をしたり、彼らに癒しの奇跡を施したイエスの言動は「神への冒瀆」と映ったのです。

さらに『申命記』21章23節に『木にかけられた者は、神に呪われたもの …』という個所があります。「木にかけられた」とは「十字架にかけられた」ということです。「神に呪われた者」であるイエスを、イスラエルのメシア(救世主)と主張する原始キリスト教団の宣教内容は、パウロのユダヤ教信仰の根底を揺るがす耐えがたいものだったのです。

しかしそのパウロに、それまでの彼の人生をひっくり返す出来事が起きます。

パウロの「回心」

パウロが原始キリスト教団の宣教運動の拠点であった「ダマスコ」という町(現在のシリアの首都ダマスカス)に近づいた時でした。『使徒言行録』9章を読んでみましょう。

……

3 … サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。
4 サウロは地に倒れ、「サウル[パウロのヘブライ名]、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。 5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。 6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」 7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。 8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。 9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

……

パウロがダマスコの町に近づいたとき、『天からの光が彼の周りを照らした』とあります。『太陽より明るく輝』く光(26章13節）で目がくらみ、彼は地面に倒れました。そして『なぜ、わたしを迫害するのか』という声を聞きます。だれが呼びかけたのかわからないので『主よ、あなたはどなたですか』と問います。『主よ』という言葉は、ユダヤ人にとっては「神だけに向かって使う」呼びかけの言葉です。パウロはそれをとっさに口にしたのです。目を開けていられないほどの光と、その中から聞こえてきた声に自分よりも「大いなるもの」・「神的なもの」を感じ取ったのでしょう。

それに対し声の主(ぬし)は、自分がイエスであることを告げます。イエスとパウロ。迫害されている者と迫害している者。敵対関係である二人ですから、本来なら危うい雰囲気になるはずです。しかし予想外なことが起こります。イエスは続けます。『起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる』。たったこれだけです。だれが「おまえのやるべきことを教えてくれるか」も告げていません。自分や弟子たちへの迫害を非難する言葉もありません。立ち上がったパウロは、一緒にいた者たちに手を引かれながらダマスコに向かったのでした。

神の「啓示」の出来事

同じ『使徒言行録』26 章に、簡潔すぎる 9 章の内容を補うような箇所があります。宣教活動をしていたパウロが訴えられて監禁され、アグリッパ王に弁明する場面です。

『サウル、サウル …』と呼びかけた声が、自分はイエスであることをパウロに伝えたあと、

……

16 わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。 17 わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。18 それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。

……

イエスは自分が出現した理由と、パウロを人々に遣わす目的をはっきり語っています。「あなたが、わたしの復活の証人になって宣教することによって、人々が〈闇の世界(サタンの世界)〉から〈光の世界(神)〉に立ち戻ることができ、罪の赦しを得られるのだ」というのです。

パウロは『ガラテア』 1 章 12 節で『わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです』と語っています。この出来事は、パウロがまったく心の準備をしていない状態において、突然に神から引き起こされたものであったので、彼はそれを「神の意志による行為」、すなわち神の「啓示」の出来事として受けとめたのです。

『使徒言行録』9 章のつづきを読みましょう。ダマスコにいたアナニアというイエスの弟子が幻の中で主からの指示を受け、パウロのところへ出かけていきます。

……

17 アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊(せいれい)で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」 18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼(バプテスマ)を受け、 19 食事をして元気を取り戻した。

……

「目からうろこが落ちる」― 何かがきっかけとなって、急にものごとの真相や本質などがわかったときよく使われます。これ、なんと『使徒言行録』が出どころなのです。知っていました？　わたしは今まで、日本の古典文学の中から引用して訳されたものとばかり思っていました。

それはともかく、パウロが神から新しい光を受け、これまでとはまったく違った見方ですべての事がらを捉えられるようになったことを表現しています。パウロはアナニアから洗礼を受けて『 20 すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝え』るようになり、人々を驚かせました。

パウロはこの回心を、「復活のイエスとの出会いの出来事」として理解しました。それは次の『コリントの信徒への手紙　Ⅰ』15 章に書かれています。

……

3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたいのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、5 ケファ[ペトロの別名]に現れ、その後十二人に現れたことです。6 次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。(中略) 8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。9 わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でも一番小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのないものです。10 神の恵みによって今日のわたしがあるのです。

……

パウロは、イエスの死は「わたしたちの罪のため」であったと理解しました。これはとても重要なことなので、次回の「原始キリスト教団」成立過程をみるとき詳しくお話しします。

『復活』についての最古の証言者

『パウロこそは、イエス・キリストへの信仰を神学的に内省し、言語化することによって、キリスト教の基礎を築いた人物である』(百瀬文晃(ももせふみあき)先生) と言われるパウロは、「新約聖書」の文書のうち、以下のような 13 の書簡を残しています。(『岩波　キリスト教辞典』より抜粋、傍線筆者。)

書　　簡　　名	特徴・内容など
『ローマの信徒への手紙』　『コリントの信徒への手紙　Ⅰ』 『コリントの信徒への手紙　Ⅱ』　『ガラテヤの信徒への手紙』 『フィリピの信徒への手紙』　『テサロニケの信徒への手紙　Ⅰ』 『フィレモンへの手紙』	歴史的・批判的研究により、パウロの直筆とみなされている。フィレモン宛は個人的な手紙。他の６つはパウロ自らが設立した教会宛ての書簡。
『エフェソの信徒への手紙』　『コロサイの信徒への手紙』 『テサロニケの信徒への手紙　Ⅱ』	「第２パウロ書簡」と呼ばれ、パウロに近い弟子たちが書いたものと思われる。
『テモテへの手紙　Ⅰ』 『テモテへの手紙　Ⅱ』 『テトスへの手紙』	「司牧書簡」と呼ばれ、パウロの神学や語彙からかなり遊離している。紀元後 100 年頃成立と推定されている。

パウロの手紙は「紀元 50 年代」に書かれています。ということは、４つの福音書の中で最初に書かれた『マルコ』が「70 年代」ですから、パウロの手紙の方が歴史的に古いということになります。つまり、イエスの復活についての最も古い証言が手紙の中に書かれています。今後の話題の中でもパウロの手紙が大いに活躍してくれます。

次回は、弟子たちの「復活のイエス」との出会いや、原始キリスト教団(エルサレム初代教会)がどのように成立していったか。また、その教義内容などについて考えていきます。

【引用・参考にした書籍】　・森　一弘　『キリスト教入門　Ｑ＆Ａ』
・大貫 隆　『イエスという経験』　・山我哲雄　『キリスト教入門』
・日本聖書協会　『聖書 新共同訳』　・『岩波　キリスト教辞典』
・小河 陽　『パウロとペテロ』(講談社、講談社選書メチエ 332、2005)　・『角川 必携 国語辞典』
・百瀬文晃　『キリスト教の原点 キリスト教概説[Ⅰ]』(教友社、2004)　・『大辞泉』
・百瀬文晃　『キリスト教の本質と展開 キリスト教概説[Ⅱ]』(教友社、2004)